

## A-22

当科における肺癌例の臨床的解析

長崎大学第2内科

○ 籠手田恒敏、植田保子、冬野誠三、雨森博政、  
中塚重和、森信興、奥野一裕、原耕平

近年肺癌の増加に伴い早期発見の重要性が強調されている。教室における原発性肺癌例の臨床的解析については既に報告して来たが今回は症例を増し有症状群と検診群に分けて検討を行った。

対象は昭和35年より昭和48年までに当科に入院した原発性肺癌215例でその内訳は剖検117例、手術71例、生検25例である。組織型は腺癌84例、扁平上皮癌77例、未分化癌54例であった。性別と組織型の関係を見ると男性では扁平上皮癌65例、腺癌58例であったが女性では扁平上皮癌12例、腺癌28例であった。これらのうち何らかの症状があり訪医したもの（有症状群）は167例（77.7%）、検診群は48例（22.3%）でありこの中には偶然の機会に発見された10例も含めた。性別では両群共に差はなく男女比は2.8:1であった。年齢別では有症状群は60才代が最多であるのに比し検診群では50才代にピークがあり10才の開きが認められた。入院時の症状は有症状群では咳嗽、咯痰、全身倦怠等が主なものであり、本来無症状に近い状態であるべき検診群で48例中31例（64.6%）に咳嗽、咯痰、血痰等何らかの呼吸器症状が認められた。この事は検診群において陰影発見より3ヶ月以後に当科に来院したものが48例中25例（52.1%）も見られ検診による陰影発見より当科入院までの期間が長い事がこのような成績を示したものとも考えられた。前医診断を見ると肺癌以外の診断を受けた症例は有症状群では98例（58.7%）であり検診群では21例（43.8%）であった。これらの診断の多くは両群共に結核が最も多く以下肺炎、肺化膿症等であった。X線分類では肺野型の頻度が有症状群で55.1%であるのに比し検診群では75.0%と差が認められた。病期分類では有症状群でⅠ期21例、Ⅱ期23例計44例（26.3%）であるのに比し検診群ではⅠ期16例、Ⅱ期7例計23例（47.9%）であった。治療と予後の関係では手術例についてみると検診群では48例中25例（52.1%）、有症状群では167例中46例（27.5%）に手術を行い5年以上生存例は各々2例と3例であった。

以上原発性肺癌215例について有症状群と検診群に分け臨床的解析を行ったが当教室の特殊性もあり種々の問題点はあるが早期発見、早期治療の重要性もさる事ながら精検の方法論及び精検ルートの確立の必要性を痛感させられた。

## B-31

肺癌非治癒切除後、自然消退を思わせる

1例 …… 術後10年8カ月および17年目の検査を中心  
に ……

三重大学胸部外科 中樞<sup>\*</sup> 京都市立病院<sup>\*\*</sup>  
並河尚二、草川実、湯浅浩、中林正人、坂井隆、  
別所謙<sup>\*</sup>、立石昭三<sup>\*\*</sup>、久保克行

肺癌の外科療法を行うさい、大部分の症例は、手術時の状況によってその予後が判明されると云つても過言ではない。しかし時にその判定を大きくくわらせる症例も出て来る。ここに示す症例も不十分な手術および術後の放射線および抗癌剤治療にもかかわらず、術後17年3カ月目の現在、元気で原職に活躍している症例である。本症例に対し術後10年8カ月および17年3カ月目に諸検査を行ったのでこれらのデータも含めて報告する。

<症 例>

45才男子、（昭和50年6月現在62才）僧侶、昭和33年2月末、旅行中に突然発熱、悪感をきたした。帰宅し某医受診して胸部し線をとつたところ左上肺野に腫瘍陰影を見出され、昭和33年4月末に、発熱および血痰がなお持続するため内科へ入院し、肺癌の疑いをもたれ胸部外科に転科している。

入院時胸部単純正面写真で左上肺野に、胸壁に接して、手拳大の腫瘍陰影が認められ、その肺側辺縁は、かなり整であるが胸壁側で浸潤性に拡がっており胸壁浸潤を来している肺癌と考えられ昭和33年4月手術を行った。左上葉に拇指頭大の硬い腫瘍および手拳大の周囲浸潤を認め、その部分は、胸壁および一部縦隔内に浸潤、癒着していた。そこで左肺全別術および腫瘍の癒着浸潤していたⅡ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ肋骨を含む胸壁の合併切除を行なつたが、Ⅰ肋骨および鎖骨下動脈周辺の浸潤巣は遺残した。切除標本では角化傾向のみられる扁平上皮癌で一部線維化や中心壊死もみられ、間質反応は強く形質細胞や小円型細胞の浸潤もみられた。術後18日目からカルチノフィリン連日20日間計15000Eおよび252r（空中線量）の放射線5日後腫胸および気管支瘻の症状を来したため中止し、その治療を行つて平熱化したので、再開5回放射線治療を行つたが再び腫胸、気管支瘻の症状の出現をみたため中止し、本人の希望で退院した。術後咯痰の排出は多かつたが、その他は著患を知らず10年8カ月後の来院では検痰で癌細胞はみられず、溶連菌陽性、また蛋白泳動でα-グロブリンがやや低下しβ-、γ-グロブリンが増加していた。免疫泳動ではIgGにおいて高い値が得られた。術後17年3カ月での検痰でも溶連菌、クレブシエラが検出されこれら菌の培養癌細胞に対する効果につき検討中である。電気泳動でGroup Specific Component増加およびIgMが増加していた。これら術後のデータに考察を加へ報告する。